

斎藤茂吉「その二」——東京帝国大学・巣鴨病院時代——

小 倉 真 理 子

はじめに

斎藤茂吉については多岐に渡る視野から様々な研究がなされている。本稿は茂吉の波乱に富む生涯を見据えた上でその作歌活動を見直し、より深く歌を理解し鑑賞するための手掛かりとなることを目的としている。紙面の都合により、今回は「東京帝国大学、巣鴨病院時代」を掲載する。これは、「斎藤茂吉の生涯―誕生から中学時代まで―」（二〇〇二年三月「東京成徳短期大学 紀要第35号」）に続く時代にあたる。歌集では『赤光』『あらたま』に掲載された歌を詠んでいた時期であり、茂吉の中では最もよく知られた歌々が詠まれている。

『赤光』『あらたま』の時代

1 アララギへの参加

東京帝国大学 正岡子規の歌を知って心酔した明治三十八年は、第一高等学校から医科大学に進むための試験に臨まなければならない年でもあった。当時は医科大学が、東京、京都、福岡の三ヶ所であり、高等学校三部（医科志望）の生徒を卒業成績順によって配分する方法をとっていた。東京に居ることを希望していた茂吉は東京帝国大学に入るためにぜひとも優秀な成績を修

めなければならなかった。「早いものにて小生も今年は卒業に候が成績が悪いため東京に居る事出来るか否やは疑問」（明治38年4月30日 渡辺幸造宛書簡）と進学に不安を持つ茂吉ではあったが、努力の結果、医科六十四名中十五番の成績で東京帝国大学医科大学に進学する事ができた。

しかし、子規短歌に傾倒している茂吉にとって、医師になるということは必ずしも魅力的な選択とはいえなかったようだ。盛んに文通している渡辺幸造には、次のような心境を明かしている。

元来小生は医者で一生を終らなければならぬ身なれば先づ身を丈夫に医学士へでもなり髯でも生やし。彼とか何んとか言つて金でも出来るだけモークケ父母にも安心させ、妻をもらへば妻にも衣服の一つも着ねばならず子を作れば教育もせねばならず今の病院を受けつげば目が廻る程多忙ならむ、斯くて小生は骨を砕き精を瀧いで俗の世の俗人と相成りて終る考ひにて又是非なき運命に御座候、
（明治38年5月6日付）

医者で一生を終わることを「是非なき運命」といい、諦めに似た気持ちで受け止めていることが知られよう。実生活でも、東京帝国大学医科大学に入學する二ヶ月前の明治三十八年七月一日に、茂吉は斎藤紀一の次女輝子（注、長女郁子は既に歿していた）の婿養子として斎藤家に入籍している。この入籍によって茂吉の立場が明確化されると同時に、世俗的な責任もはっきりとした形で茂吉の肩に掛かってきていた。紀一の長男西洋は、この時まだ五歳であって、明治三十六年から着々と進められつつある青山脳病院の次期後

継者としての役を茂吉が担うことが形の上からも明らかにになったからだ。以後、茂吉は好きな歌作と、本業としての医学と二つの道を歩むことになった。

とはいえ、子規を知り短歌の世界に足を踏み入れた茂吉は、大学に入学後もますます歌作への道にのめり込んでいった。進学時の好成绩とは対照的に、東京帝国大学医科大学での卒業試験では、百三十二人中百三十一番の成績であった。このことは大学在学中、茂吉の心の向く所が医学の外にあったことを端的に示しているといえるだろう。なお、茂吉は本来の卒業試験時にチフスで発熱し受験できなかったため、卒業試験は通常より一年延期して受けている。

伊藤左千夫入門 こうした茂吉が、子規の後継者である伊藤左千夫の門を叩くのは時間の問題でしかなかった。左千夫との出会いに到るまでの経過は、茂吉が自ら語る「思出す事ども」に詳しいが、概略を述べれば次のようになる。

茂吉は先に触れたように、読売新聞の池田秋旻選の短歌欄に投稿していたわけだが、その、秋旻の書く「歌袋」（明治38年2月24日掲載）の中で根岸派（注、正岡子規を中心とする根岸短歌会から始まった短歌の流派）に「馬酔木^{アシビ}」という雑誌があるのを知った。そこで、「馬酔木」を買って読んでみたのだが、充分に理解するには到らなかった。ところが、明治三十八年の夏、以前から歌の指導を受けている中学校時代の級友渡辺幸造宅を訪れた際、「ホトトギス」や「馬酔木」などの雑誌や書物を見せてもらうほか、「新仏教」の新年号に掲載されている左千夫の肖像を見るなどして、「馬酔木」にも左千夫にも強い関心を懷くようになった。

その後、茂吉が左千夫を訪問する端緒となったのは、茂吉が左千夫に宛てた一通の手紙である。その手紙とは、茂吉が「馬酔木」の作品を模倣して使った「がも」の語法について、小学校の後輩で三歳年下の長瀬金平（早稲田大学予科に在学中）に誤りを指摘されたため、躍起となった茂吉が左千夫に質問状を送ったものである。これに対する左千夫からの返事に、茂吉はいく悦んだ。

直ぐ返事が来た。白い半紙に無造作に、『がも』『がも』のことを説明して来て、ちつとも『がも』のことは云つてゐない。それでも僕は非常

に忝く思った。かういふ気持は僕の生涯にも数へる程しか無いであらう。それから僕は感謝して手紙をかき、自作十ばかりを封じた。ところが又手紙が来て君の歌は邪気がなくて面白いから、あの中の五首をアシビに載せるといつてあつた。僕も出世したと思つたであらう。歌はアシビ第三巻の二号か三号に載つてゐる。（引用者注、実際には第三巻第二に掲載されている）『あづさゆみ春は寒けど日あたりのよろしきところづくし萌ゆ』といふのはその一つである。そして先師は、遊びに來いと手紙につけ加へてあつた。（「思出す事ども」）

このようにして、左千夫への訪問が実現したのは、東京帝国大学医科大学入学後の明治三十九年三月十八日のことであつた。左千夫が満四十一歳、茂吉が満二十三歳の時である。これより、茂吉は左千夫を師として歌作に精進していく。なお、渡辺幸造とは以後も友人として長く交流していくが、歌作の力量を蓄えていった茂吉にとって、師としての幸造の役割は次第に薄れていくこととなる。

アシビ・アカネ・アララギ 左千夫に入門した茂吉は、いよいよ「馬酔木^{アシビ}」の新人となった。元来「馬酔木」は亡き子規を中心とした根岸短歌会の機関雑誌として明治三十六年六月に発足したもので、伊藤左千夫、香取秀真、岡麓、蕨真、長塚節、安江秋水らが活躍していた。その後、石原純、久保田山百合（島木赤彦）、三井甲之、小泉千樫、及び茂吉らの若手が参加したのである。が、茂吉が入門した頃、左千夫は新聞「日本」や雑誌「趣味」の短歌選者となったり、「野菊の墓」などの小説執筆に関心を向けたりしていた「馬酔木」への興味を失っていた。実際、明治四十年には二号が発刊されたのみで、明治四十一年一月をもって「馬酔木」は終刊となってしまう。

これを受ける形で発足したのが、明治四十一年二月創刊の「アカネ」で、編集は、根岸派の新進気鋭として注目される三井甲之であつた。「アカネ」という雑誌名は左千夫による命名であり、左千夫は「馬酔木」の後裔としての「アカネ」を三井に託したことになる。けれども、すでに「アカネ」創刊の時期に二人の間には感情的な齟齬が生じていた。三井が左千夫の文学活動に対して厳しい批判と攻撃をしたためである。左千夫にとっても左千夫の同調者である茂吉や千樫にとっても穏やかな状況とはいえなかったであらう。

こうした中、上総の蔵真から新雑誌刊行の計画が持ち上がった。この話に、茂吉らの気持ちが動かなかったはずはない。明治四十一年十月には蔵真を編集兼発行人とする「阿羅々木」が刊行された。ここに、根岸派は「アカネ」と「阿羅々木」の二つに分裂することとなる。三井は「阿羅々木」を敵対視し、それに対しては茂吉が応戦した。負けん気の強い茂吉の気性が論争の上で発揮されることになったのである。同時に、茂吉は、明治四十二年一月発行の「阿羅々木」第二号で「短歌における四三調の結句」という歌論と「塩原ゆき」五十首を発表した。「短歌における四三調の結句」は、歌の結句が三四調でなければならぬという井上通泰の説に対し、万葉集の歌を詳細に調べて客観的な論証をした上で異説を唱えた完成度の高い論である。一方、「塩原ゆき」は、明治四十一年十月の医科大学での親睦旅行の体験を歌った作品であり、これは茂吉が元来持っていた空想的・観念的習癖から写実的作風に向う契機となったものといえる。「阿羅々木」同人として茂吉が本格的に活躍する時期を迎えたのである。

山がはの水のいきほひ大岩にせまりきはまり音とどろくも

〔赤光〕「塩原ゆき」

しほ原の湯の出でどころとめ来ればもみぢの赤き処なりけり

山の湯のみなもとどころ鉄色にさびさびにけり草もおひなく

「阿羅々木」と「アカネ」とは、その後、合併する動きもあったが、結局決裂。明治四十二年十月に「阿羅々木」は信州の柿乃村人（島木赤彦）の主催する「比牟呂」と合併して東京本所の左千夫宅から改巻第一号を刊行し、基盤を固めて再出発することとなった。なお、第二巻からは表題も「阿羅々木」から「アラゝギ」と変え、面目も一新した。

観潮楼歌会 茂吉がアララギの代表の一員として参加したものに観潮楼歌会がある。観潮楼歌会は、森鷗外の発案によって明治四十年三月に始められたもので、アララギ派と明星派との交流を目的とした会である。鷗外は詩集『沙羅の木』序文で「其頃雑誌あららぎと明星とが参商の如くに相隔たつてゐるのを見て、私は二つのものを接近せしめようと思つて、双方を代表すべき作者を観潮楼に請待した」と述べている。当時の歌壇を大局から見る視点を持ち、日本の近代文学をリードする鷗外でなくしては出来なかったことと

いえるだろう。観潮楼とは東京湾の潮の干満が臨める場所という意味で、本郷区千駄木町にある鷗外宅をさした。この会には、初め、伊藤左千夫一人が出席していたけれども、アララギの援軍として長塚節、小泉千樫、平福百穂、茂吉らが参加することとなった。茂吉が初めて出席したのは明治四十二年一月九日。観潮楼歌会は明治四十三年六月には終会している。茂吉の出席回数もそれほど多いとはいえない。けれども、この歌会をとおして、鷗外はもちろん、会の出席者である与謝野鉄幹・石川啄木・上田敏・北原白秋・木下李太郎・吉井勇ら明星派の人々や、佐佐木信綱など「心の花」の歌人とも交流の機会を持つことが出来たことは茂吉にとって大きな収穫であった。

2、「赤光」刊行から「あらたま」へ

左千夫との対立と『赤光』 観潮楼歌会による影響も加わり、茂吉らアララギの若手は、新しい歌風を切り開くことに眼を向けていた。ちょうど茂吉が医科大学を卒業して、副手として医科大学の付属病院を兼ねる東京府巢鴨病院に勤務していた頃（勤務は明治四十四年二月より）である。茂吉の言葉によれば「明治四十四年から僕も学校を卒業して、東京府巢鴨病院に勤めるやうになり、アララギの編集に骨折り、当時本郷に下宿してゐた中村君と会ふ機会も多く、また、赤彦・憲吉・千樫と僕とで、新しい歌風といふやうなことを夢みてゐたので、幾らかづつほかの会員との歌とも違つて行つた」（「中村憲吉君」ということになる。明治四十四年前に、前田夕暮の『収獲』（明治43年3月）、若山牧水の『別離』（明治43年4月）、吉井勇の『酒ほがひ』（明治43年9月）、石川啄木の『二握の砂』（明治43年12月）など話題となった歌集が相次いで出版されたことも、茂吉らに少なからぬ刺激を与えたことだろう。茂吉はそのほかに、同じ山形県生まれで新時代の思想家であり、且つ、文芸批評家として活躍していた阿部次郎や、後に「赤光」の挿絵となる仏頭図の作者、木下李太郎への関心も強かった。

このように、新しい時代の中で新しい歌風を作り出すという気負いのあった茂吉らにとって、左千夫は旧弊で分かつ屋の師と映った。

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時たちけり

例えば、茂吉の詠んだ右の歌に対する批評において、左千夫と赤彦とは立

場が大きく異なっていた。左千夫が「前二句の『梅はめば酸し』といふ意味と少女が人に恥らふやうになつたといふ事柄と、この二つの意味がどういふ点に於いて交渉して居るかといふの不可解なことは争ふ事の出来ぬ事実である」(『短歌研究』明治44年1月「アララギ」と述べるのに対して、赤彦は同じ「アララギ」において「事件をその儘に捉へて、形態の描写を明瞭にしようと勉めたのは已に過去の仕事である。我々は今已に物や事柄から進んで、その上に味はれるシミジミした情緒の影を追ひつゝあるのである。')と真つ向から対立した意見を掲載した。このような歌の解釈と批評をめぐる対立は、赤彦の歌「あるものは萩茹日和木瓜の果を二人つみつゝ相恋にけり」(明治45年2月)でも生じた。また、左千夫が推奨する岡千里の歌に対して、茂吉が「アララギ」誌上において強硬に攻撃するようなこともあった。多分に感情的な対立という様相を呈しながら、左千夫の「強ひられたる歌論」(明治45年6月)を頂点に、アララギ誌上で激しい論争が繰り広げられたのである。この対立は、大正二年十月に東雲堂書店から刊行された茂吉の最初の歌集である初版『赤光』の跋文でも触れられている。

明治三十八年より大正二年に至る足かけ九年間の作八百三十三首(注、実際は八百三十四首)を以て此一卷を編んだ。たまたま伊藤左千夫先生から初めて教をうけた頃より先生に死なれた時までの作になつてゐる。アララギ叢書第二編が予の歌集の割番に當つた時、予は先づ此一卷を左千夫先生の前に捧呈しようと思つた。而して、今から見ると全然棄てなければならぬ様なひどい作迄も輯録して往年の記念にしようと思つた。特に近ごろの予の作が先生から褒められるやうな事は殆ど無かつたゆゑに、大正二年二月以降の作は雑誌に発表せず此歌集に収めてから是非先生の批評をあふがうと思つて居た。ところが七月卅日の、この歌集編輯がやうやく大正二年度が終わつたばかりの時に、突如として先生に死なれて仕舞つた。(略)悲しく予は此一卷を先生の霊前に捧げなければならぬ。

和解がなされぬまま師を失つた悲しみと混乱とは、初版『赤光』の冒頭に据えられた「悲報来」十首によって表されている。

ひた走るわが道暗ししんと堪へかねたるわが道くらし

ほのぼのとのおれ光りてながれたる螢を殺すわが道くらし
すべなきか螢をころす手のひらに光つぶれてせんすべはなし

茂吉が『赤光』において左千夫の批評を仰ぐうとしていた作には、「おひろ」四十四首「死にたまふ母」五十九首等、茂吉の代表的な作品も含まれている。師との論争のうちに開拓して言った新たな境地がこれら『赤光』の歌々に結実していることは確かであろう。さらに、茂吉は「短歌は直ちに『生のあらはれ』でなければならぬ」(『短歌小言』)という考えを表して後の短歌写生説の基盤をも築いた。

一方、論争で窮地に陥つた左千夫も「おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しとく」と柿の落葉深く」等、晩年の絶唱と言える五首の連作「ほろびの光」(大正元年11月「アララギ」)を詠み、「叫びの説」となる歌論をまとめていった。感情が先走り、一見、不毛に見える論争ではあったが、その中でも、それぞれが確実に掴むべきものを掴んでいったといふことができるのではあるまいか。

歌集『赤光』 茂吉には十七の歌集が編まれている。その中で最初に位置するのが初版『赤光』である。初版『赤光』は、大正二年十月に東雲堂書店から刊行されたもので八百三十四首が収められている。これを大幅に改定し、歌の配列も改めて編集したのが改選版『赤光』で、大正十四年八月春陽堂から発行したものを定本とした。茂吉は、初版『赤光』の歌に不満の気持ちが強く、改選『赤光』跋で「『赤光』の歌は既にいろいろの書物に引用せられなければならない、今後『赤光』の歌を論ぜられる場合には、改選『赤光』の方に拠つてもらひたいと思ふ」と明言している。しかし、師である伊藤左千夫の急逝という大正二年に起つた衝撃的な出来事を冒頭に据えて、大正二年作の歌から明治三十八年作の歌へと逆年代順に編集されている初版『赤光』と、明治三十八年の歌から大正二年へと年代順に並べられている改選『赤光』とは、歌集として大きな違いがあると言わなければならない。初版『赤光』は、茂吉がアララギの新進として新しい歌を作りあげようとしていた時期の歌集であるし、改選『赤光』は初版刊行より八年後、一流の歌人として評価の定まった茂吉が、第二歌集『あらたま』の編集を終えた後の心情と短歌観をもつて改めたものだからである。同じ『赤光』という語を掲げてはいるけれども、

初版『赤光』と改選『赤光』とは、異なる歌集だということを認識しなければならぬ。

いずれにしても、『赤光』は初版が出て以来、高い評価をもって世に受け入れられた。茂吉が『赤光』の歌は私の敬愛する先輩諸氏からも遠国土に住むまだ知らない人々からも愛されて、さうして私は少し有名になった」(『赤光』再版に際して)という如くである。中でも、『赤光』を最高度に讃えた一人に芥川龍之介がいた。

僕は高等学校の生徒だった頃に偶然「赤光」の初版を読んだ。「赤光」は見る見る僕の前へ新しい世界を顕出した。爾来僕は茂吉とともにおたまじやくしの命を愛し、浅茅の原のそよぎを愛し、青山墓地を愛し、三宅坂を愛し、午後の電燈の光を愛し、女の手の甲の静脈を愛した。

(中略) 僕の詩歌に対する眼は誰のお世話になったものでもない。斎藤茂吉にかけて貰ったのである。もう今では十数年以前、戸山の原に近い借家の二階に「赤光」の一卷を読まなかつたとすれば、僕は未だに耳木兎のやうに、大いなる詩歌の日の光をかい間見ることさへ出来なかつたであらう。(中略) 近代日本の文芸は横に西洋を模倣しながら、豎には日本の土に根ざした独自性の表現に志してゐる。苟くも日本に生を享けた限り、斎藤茂吉も亦この例に洩れない。いや、茂吉はこの両面を最高度に具へた歌人である。(中略) 茂吉よりも秀歌の多い歌人も広い天下にはあることであらう。しかし「赤光」の作者のやうに、近代の日本の文芸に対する、一少なくとも僕の命を托した同時代の日本の文芸に対する象徴的な地位に立つた歌人の一人もゐないことは確かである。歌人? 何も歌人に限つたことではない。二三の例外を除きさへすれば、あらゆる芸術の土の中にも、茂吉ほど時代を象徴したものは一人もゐなかつたと云はなければならぬ。

(「僻見」大正13年3月)

芥川の評は第二歌集『あらたま』をも視野に入れて論じられているわけだが、茂吉の作品が同時代の人々にいかに印象深く受け入れられたかの一端を知ることが出来る。特に、「死にたまふ母」は人々の注目を集めた。茂吉自身「歌集赤光が発行になると、この『死にたまふ母』一連はなかなかの評判となり、赤光が一躍有名になつたのはこの一連の連作のためであつた。ま

た、誰かの挽歌を作るときには、大体私のこの連作をば目安にして作るといふ歌人が幾たりもゐた」(「作家四十年」と述べている。その「死にたまふ母」は、大正二年五月二十三日に五十九歳で亡くなった実母いくの死を悼んだ連作で、母の歳に因んで五十九首の歌から為っている。連作は、母危篤の知らせを受けての帰郷、病の母の看病、母の葬送、母の追慕という四連の構成を持つ。

みちのくの母のいのちを一目みん一目みんとぞいそぐなりけれ

(其の一)

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる (其の二)

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳ねの母は死にたまふなり

わが母を焼かねばならぬ火を持てり天つ空には見るものなし

(其の三)

山ゆゑに笹竹の子を食ひにけりははその母よはその母よ

(其の四)

いずれも母への慟哭が結晶した印象深い歌々といえよう。この「死にたまふ母」と共に『赤光』の頂点を形成しているのが「おひろ」四十四首である。「おひろ」なる女性に関しては諸説紛々としていた時期もあったようだが、現在は、斎藤家で茂吉付きの女中をしていた「おこと」という女性をモデルとしているという方向ではほぼ定着している。藤岡武雄氏は、当時茂吉と生活を共にしていた医師平義智から聞いたこととして「茂吉と女中『おこと』は人目を忍んで肉体の交渉をもつたが、それがやがて斎藤家の人びとにわかつて、この時期『おこと』は暇を出され郷里に帰り、茂吉は悲歎の日々を送つたと証言される」と述べている。ただ、「実在の『おひろ』の詮索は、作品の『おひろ』を解する上には、ほとんど必要でない。『おひろ』はそれほど芸術的に純化された作品なのである」(柴生田稔「アララギ」昭和33年11月「斎藤茂吉短歌合評(八)」という指摘も重要である。母の死と時期を同じくする「おひろ」との別離は、「おひろ」なる女性との別離は、母の死に先立つ四月頃であつたと考えられる)、その悲しみが相乗的に高められ芸術的な境地を作り上げているといえるからだ。連作「おひろ」は、別離に対する深い悲嘆を詠みながら官能的な回想に浸り、諦めの気持ちへ向かうという構成

をもって歌われている。

なぜかへばものみな暗しひんがしに出づる星さへ赤からなくに

〔其の一〕

ほろほろとのぼるけむりの天にのぼり消え果つるかに我も消ぬかに
ほのぼのと目を細くして抱かれし子は去りしより幾夜か経たる

〔其の二〕

かなしみの恋にひたりてゐるとき白ふぢの花咲き垂りにけり
愁へつづにし子のゆゑ遠山にもゆる火ほどの我がころかな

〔其の三〕

このような悲傷の二大連作に加えて、伊藤左千夫の死を悼む「悲報来」(前掲)とが渾然一体となり劇的な効果をもたらしながら、『赤光』の頂点を形成しているといえる。

輝子との結婚 斎藤家の次女輝子との結婚は、茂吉上京当時から約束されていた事だった。上京当事の少年茂吉が、未だ赤子の輝子を背負って子守をしたり、友人に「僕の未来のワイフだ」と答えたりしていたという(全集第四十卷月報二十五 渡辺涼作「茂吉先生と私の家(下)」)。それが具体的になって来たのは、明治三十八年七月一日付けで、茂吉が輝子の女婿として入籍した時といえるだろう。茂吉二十四歳、輝子十一歳で、茂吉が東京帝国大学医科大学に入学する二ヶ月前の事であった。以後、茂吉は輝子の成長を見守りながら、妻となる日待つことになる。歌集『赤光』では輝子を指す「をさな妻」の歌がくり返し詠まれている。

をさな妻こころに持ちてあり経れば赤き蜻蛉の飛ぶもかなしも

〔をさな妻〕

汝兄よ汝兄たまごが鳴くといふゆゑに見に行きければ卵が鳴くも

〔うめの雨〕

女の童をとめとなりて泣きしときかなしく吾はおもひたりしか

〔秋の夜ころ〕

水のべの花の小花の散りどころ盲目となりて抱かれて呉れよ

〔或る夜〕

第二首からは、輝子が茂吉を「汝兄」、つまり、「お兄さま」というような

形で呼んでいたということもわかる。その輝子との結婚式は、大正三年の初め、茂吉三十三歳、輝子二十歳の時だった。茂吉はすでに女婿として入籍しているわけだから、ごく内々に結婚披露をして二人の結婚が成立した。しかし、この結婚はその出発からして安定したものとはいえなかった。結婚を前に茂吉には「おひろ」で歌われた女性との恋愛があったし、輝子にも茂吉の他に恋愛の対象があったと考えられるからだ。第二歌集『あらたま』巻頭に詠まれた憤怒の歌々は、こうした状況を想像させるのに十分であろう。

ふり灑ぐあまつひかりに目の見えぬ黒き蛭を追いつめにけり

〔黒き蛭〕

をさな妻あやぶみまもる心さへ今ははかなくなりけるかも

〔折にふれ〕

わが妻に触らむとせし生きものの彼のいのちの死せざらめやも

また、靴下の綻びを見つめる次の歌には、斎藤家の令嬢として華やかに育ち、いまだ年若い輝子が家庭的な細かい事柄に行き届いていない様子が伺われ、二人の間に感覚的なずれが生じていることを推測させる。

朝どりの朝立つわれの靴下のやぶれもさびし夏さにけり〔朝の螢〕

しかし、それと同時に、茂吉が生涯の伴侶として妻を愛する気持ちが強かったことも忘れてはならない。

こころ妻まだうら若く戸をあけて月は紅しといひにけるかも

〔朝の螢〕

目をとぎて二人さびしくかうかうと行く松風の音をこそ聞け

〔一心敬礼〕

妻とふたり命まもりて海つべに直つつましく魚くひにけり

〔海浜守命〕

十五歳の少年の頃から輝子を見守り続けてきた茂吉にとって、輝子は妻であると同時に肉親にも近い情愛を抱いていたといえるだろう。茂吉の次男北杜夫は二人の関係について次のように述べている。

茂吉は「おひろ」との肉体的恋愛もあり、また多くの娼婦を買っており、以前に書いたように、妻に対し「口より先に手がとんできた」というごとく、てる子をぶんなぐったことも事実である。しかし、茂吉は妻

を愛していたので、どうも彼のほうが分がわるい。

〔青年茂吉〕「赤光」「あらたま」時代』平成3年6月 岩波書店

なお、引用文にある娼婦とは白山遊郭の女性を指している。白山遊郭は茂吉の勤務先である巣鴨病院に近い場所、巣鴨病院の医局員が盛んに出入りしていた。詳細は、藤岡武雄氏が発見した医局院の秘録「卯の花そうし」〔評伝 斎藤茂吉〕によって知ることが出来る。

留学計画の挫折 茂吉の思うに任せない生活は、輝子との関係ばかりではなかった。ちょうど輝子と結婚をした頃、茂吉には留学の計画が進んでいた。それは、二度の留学を経験している養父紀一が、青山病院の次期後継者である茂吉に留学という形で実質的にも対外的に力をつけようとしていたためであるが、茂吉自身も留学に期待するものが大きかったといえる。

小生は医者の方の研究の結果は未だ一つも発表しません、これはいつも心ぐるしく思つてゐます。何とかしたいとおもひます。アララギの方、会計の方さへ何とか片つけて、一つ取りかゝらうかと常に苦心してゐます。(中略)とにかく明春は巡礼のやうな心持で西方へ旅立たうとおもひます。(大正3年7月26日付長塚節宛書簡)

しかし、同年七月二十八日、オーストリアとセルビアとが開戦し、第一次世界大戦となるに及んで、茂吉の留学は不可能となった。これは、留学によって医学の研究をしろんでいた茂吉にとって大きな打撃であった。

独逸と戦争などしたから、小生も遊学が出来なくなり困り居り候、今後もどうせばよろしきかと存じ居り候。何か名案御座なく候や、アララギも赤彦に専念にやつてもらつて、少し医学の事もやりたし。発行所を小生の所に置けば、何の彼と言つても八分通りは小生が片付けねばならず、それに歌や雑論や選歌などやるのだから、非常に骨折申候、正直を申せば、正月以来医者の書物一ページも読みし事無之候

(大正3年9月28日付長塚節宛書簡)

医者として生きることは処世の方法と述べる時期のあった茂吉ではあるけれども、一旦医学を学んだ上は医学者としての野望も生まれてきたはずである。それが全くといってよいほど医学に向かうことが出来ない現実となつては忸怩たる思いがあつたに違いない。編集などを含めアララギの雑務から解

放され、医学に向かうためには是非とも留学を断行する必要があつたのだ。それが留学を目前にしての中止は茂吉にとって大きな誤算であり、挫折だったといえる。留学は七年後の大正十年十月に実現されたが、その間、茂吉は医学的業績から縁遠く、心ならずも臨床医としての日々に明け暮れることになった。

私は足掛七年巣鴨にゐて、勤続満五年の賞(風呂敷)をもそのあひだに貰つた。患者の血圧をも沢山しらべたし、プレクシス・ヒヨリオイデウスも切つてみたし、麻痺性痴呆の脳血管も切つて見たが何も纏めるやうなことがなくて、巣鴨を去つた。さうして、真に『医学の哲学』には入ることができず、七年のあひだに治療医学のために長い途を歩いたやうなものであつた。

巣鴨病院の隣は、いはゆる岩崎の森で、岩崎氏邸は木立が鬱蒼と繁つてゐた。朝は雉子が啼く、私は学問上の希望を失つても、その雉子の切実な声を愛した。(回顧)

この心情は『あらたま』の中でも、
尊とかりけりこのよの暁に雉子ひといきに悔しみ啼けり(雉子)
と詠まれている。大正六年一月になると、茂吉は巣鴨病院をやめて自家の青山脳病院での診療に従事することとなった。養父紀一が国会議員に立候補する決意をしたためである。だが、そこで待っていたのも、やはり「治療医学の途」でしかなかった。茂吉は医者としての生活においても、挫折と諦念とを味わわなくてはならなかったのだ。

赤彦の上京と「アララギ」 茂吉の留学計画が起こつていた大正三年の頃、「アララギ」は深刻な問題を抱えていた。財政的安定を計るために大正二年七月から「アララギ」は会員制をとり、茂吉が会計を担当、千樫が編集を担当していた。ところが、千樫の編集は遅延が度重なり、雑誌運営の先行きが見えない状況になっていた。例えば、大正二年十二月刊行予定の新年号が翌大正三年の一月末にようやく刊行されるというやうな事態の中で、見かねた茂吉が、千樫から原稿を取り上げて編集を完了させるといふことさえあった。特にこの新年号の遅刊問題は、かねてから千樫の編集に不満を持っていた赤彦に上京の決意を促すきっかけともなった。当時はまだ茂吉の留学計画も進

行中であつたから、それも相まって「アララギ」の行く末が懸念されたわけだ。一時は廃刊も考慮されるほど「アララギ」が窮地に立っていたことが、赤彦の書簡から知ることができる。

斎藤が洋行後をどうするかと内々心配してゐたのだが今頃こんな問題を見てゐるやうでは困る事甚しいアララギを止めるのは誠に悲しいどうか工夫は無いのか河西に編輯させるも一方法だ彼ならば一通りの編輯は充分に出来る併し君達が充分にてやる必要がある此処で私が大奮発して四月から東京に自活だけの職業を求めるも一方法だ兎に角急に何とも考へられぬ熟考して申し上げる何か一つ考へて見て下さい此処で中止するのはどうも惜しく残念だ

(大正3年1月7日付中村憲吉宛)

このような中、大正三年四月に赤彦が上京するに至つたのは茂吉にとって、取りあえず幸運だったといえる。大正三年六月号の「アララギ」で、「島木赤彦君は法師のやうな心持で国を出た。済まぬ事とは思ふが赤彦君の上京を機としてアララギの仕事は一切無理に同君に願ふ事にした」(「編輯所便」)と記した茂吉は、以後、「アララギ」編輯から一歩退き、一手に担っていた雑務からも次第に身を引くことが出来るようになった。

もちろん、赤彦が上京するについては、赤彦側の抜き差しならない事情もあった。当時、赤彦は妻子と離れて長野県東筑摩郡広丘小学校の校長として勤めていたが、孤独な日々を送る中で、同校の教師の中原静子と深い恋愛に陥っていた。小学校校長であると同時に、長野県諏訪郡視学という、教育界の重責にありながら、それら一切を放棄して上京する赤彦には、「アララギ」への熱情のほかに、抱えている恋愛を清算するという意味もあったのである。時に赤彦三十九歳、六人の子供の父であった。

とにかく、この赤彦の上京によって、窮地に立っていた「アララギ」の状況は解消された。左千夫の時代を受けて、茂吉や千櫨、憲吉、赤彦など同人による新しい「アララギ」が確立された後に期待されるのは、後進の会員を指導してゆく次世代の「アララギ」である。教育者としての経験を持つ赤彦がこの期にめぐり合わせたことは、偶然とはいえ、うってつけの人選であつたといえるだろう。「アララギ」の体制は、以後、赤彦を中心に固められていくこととなった。

長崎へ 赤彦に編輯を譲つてからの茂吉は、求心的な「アララギ」体制からやや離れて、新聞や「アララギ」以外の雑誌などにも手を伸ばしていった。こうした活動は赤彦の非難を受けることにもなったが、「アララギ」の雑務から開放された茂吉は、意の赴くままに歌の世界を広げることが出来たといえるだろう。また、巣鴨病院の勤務をやめたことは、茂吉に寂しさを感じさせる一方で、歌作への時間的な余裕を生み出し『あらたま』の世界に飛躍をあたえた。これに関しては、茂吉も、

大正六年は前にも云つた如く、足掛け七年の勤務を罷めて、しきりに寂しさを翹へてゐるけれども、作歌の方面では、一軌道に乗つた趣で、若干首の注目すべき歌を残して居る。

(「作歌四十年」)

と、述べている。実生活に根ざす憤怒や懊悩が、諦念と寂しさを経て、一応の落ち着きを見せると同時に、北原白秋や前田夕暮など他派の歌人たちのと交流による混沌とした時期を経過して、茂吉自身の内に消化された歌が詠まれたといえよう。

また、歌論にしても、写生即象徴という考えを明らかにし、茂吉の「写生説」の骨子が固められていった。

予の作は、『実相流』である。また、『写生流』であると謂つてもよい。そして予が真に『写生』すれば、それが即ち、予の生の『象徴』たるのである。この意味で、予の作は『象徴流』だと謂つてもよい。

(「童馬漫語」)

このように、巣鴨病院をやめてからの茂吉には歌に心を向ける余裕が生じていたといえる。が、巣鴨病院退職後一年もたない大正六年十二月十八日に、長崎医学専門学校へ精神科教授として赴任することになったのは、茂吉の生活にとって大きな展開であつた。これは東大精神病学教室先輩で長崎医学専門学校の前任、石田昇がアメリカに留学をするという中で、東大の恩師呉秀三教授の推薦を受けて急に浮上してきた話である。巣鴨病院をやめて、養父の経営する青山脳病院で勤務している茂吉は、比較的自由に進退の対応ができる者として白羽の矢が当てられたということになるだろう。

この長崎行きは茂吉にとって「二たび歌に専になることが出来ぬやうになり、私の歌人としての生活はここに一挫折を来してゐる」(「斎藤茂吉集巻

末の記」というものであった。「長崎へ」と題される十二首の歌によって閉じられている『あらたま』は、まさに、様々な形の挫折が内包されており、それ故に、茂吉の悲痛な心情が結実する歌集となったのである。

第二歌集『あらたま』 この悲痛な心情についていち早く指摘したのは長塚節である。節が、『あらたま』を代表する一首、「あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり（「一本道」）」に対して次のように述べたのは卓見といえよう。

我に与えられた一筋の大道が曠野の間に通じている。我はこの大道を踏むより外に自分の生きる道はない。これやがて我が全生命であると解釈するのが当然であろう。一方に於いては大なる確信の歌であるけれども一方に於いては全く諦めの歌である。そこに悲痛の分子を包蔵している。

（斎藤君と小泉君）大正3年6月「アララギ」

愛人との別離、ままならない結婚生活、さらには留学の延期など、実生活における様々な形での鬱屈や挫折が「悲痛の分子」として包蔵されながら『あらたま』の世界を形作っていると考えられるからである。現実の生活を甘んじて受け入れてはいても、そこで諦めきれない気持が「悲痛の分子」として歌集の随所に現れていることになる。大正三年作で「諦念」と題された次のような歌々からは、こうした茂吉の心情を端的に知ることができる。

橡の太樹をいま吹きとほる五月かぜ嫩葉たふとく諸向きにけり

この夜は鳥獣魚介もしづかなれ未練もちてか行きかく行くわれも

また、一方においては、沈静した境地で自然を見据える歌も現れ、『あらたま』後半の世界へと繋がっていくことになる。

ゆふされば大根の葉にふる時雨いたく寂しく降りにけるかも（「時雨」）
ひとむらとしげる竹むら黄に照りてわれのそがいひに冬日かたむく

（小竹林）

祖母守谷ひで（八十一歳）の死を詠んだ「冬の山」「こがらし」「道の霜」の三部作四十八首や、「箱根漫吟」五十七首など、『あらたま』後半の大作はこうした歌境が集約していったものとみられる。諦念から茂吉の心に生じた寂しさはすべて解消されることはなかったにせよ、『あらたま』の巻末に近い「箱根漫吟」では、『あらたま』冒頭にあった憤怒や懊悩が、諦念と寂し

さを経て、一応の落ち着きを示す形となって詠まれている。

ところで、初版『赤光』の刊行は大正二年十月であり、第二歌集『あらたま』の刊行は大正十年一月であって、いづれも、歌の制作に引き続いて歌集が刊行されている。が、それ以降の歌集は、歌の詠まれた順番と、歌集が刊行された順番とが大きく異なっている。結果的には、『あらたま』以降、次に刊行された『寒雲』（昭和十五年三月刊）までは、約二十年という長い歳月が経過している。もちろん、その間も歌作は続けられていたわけだし、改選版『赤光』の編集という作業もしている。ただ、『あらたま』以後、『寒雲』の刊行まで時期が大きくあいたことは確かといえる。この期間、「アララギ」に発表される歌はあったとしても、読者が歌集の形で目にするものが出来たのは『赤光』と『あらたま』の二歌集のみであった。『赤光』の項目でも述べたように、茂吉は初版『赤光』刊行後、直ぐに評価が高まり、第二歌集『あらたま』も注目される歌集となった。つまり、この二つの歌集を通じて茂吉の歌人としての評価が定まっていたといっても過言ではないのである。その意味において、この『あらたま』は、『赤光』と同様に重要な位置にある歌集ということができよう。